

米国



1 農・畜産業の概況

米国経済における農業の位置付けは、他産業の発展に伴い低下傾向にあるが、2017年のGDPに占める農業生産の割合は4.5%(前年比0.1ポイント減)と、前年並みとなった。

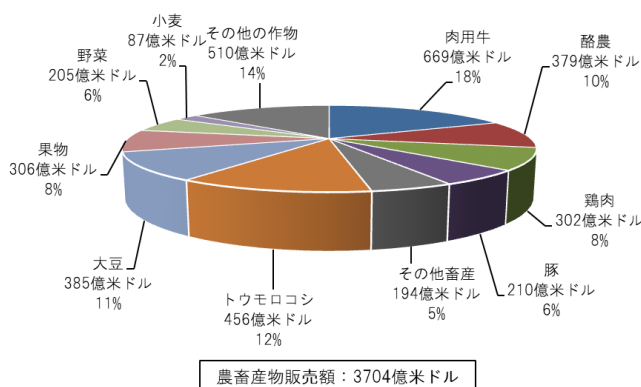
2017年の農業経営体数(農畜産物の年間販売額1000米ドル以上)は、前年比0.6%減の204万戸、農用地面積は同0.3%減の9億37万エーカー(3億6437万ヘクタール)となった。1経営体当たりの農用地面積は、同0.5%増の441エーカー(178ヘクタール)であった。なお、年間10万米ドル以上の農畜産物販売実績のある経営体は全体の18.5%で、全農用地面積の69.8%を占めた。

2017年の農畜産物販売額(現金収入。自家消費分を除く)は、3704億米ドルと前年を3.3%上回った(図1)。

部門別に見ると、作物部門は同0.5%減の1949億米ドルとなった。このうち、生産量の約4割が家畜飼料に仕向けられるトウモロコシは、456億米ドル(作物部門に占める割合は23.4%)と最大を占めた。次いで、大豆が385億米ドル(同19.8%)、果物が306億米ドル(同15.7%)、野菜が205億米ドル(同10.5%)となった(図2)。

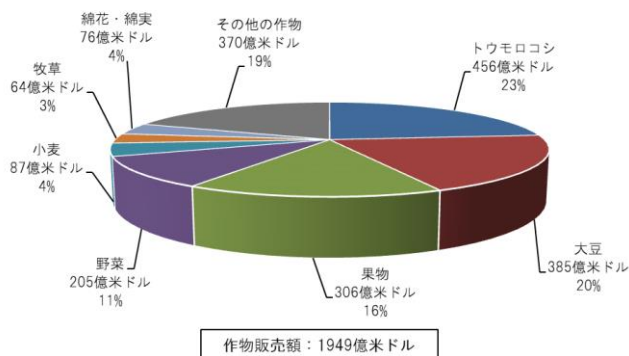
畜産部門は、同7.9%増の1756億米ドル(農畜産物販売額に占める割合は47.4%)となった。この内訳を見ると、肉用牛が669億米ドルと畜産部門のうち38.1%を占めた。次いで、酪農が379億米ドル(畜産部門に占める割合は21.6%)、鶏肉が302億米ドル(同17.2%)、豚が210億米ドル(同12.0%)となった(図3)。

図1 農畜産物販売額(2017年)



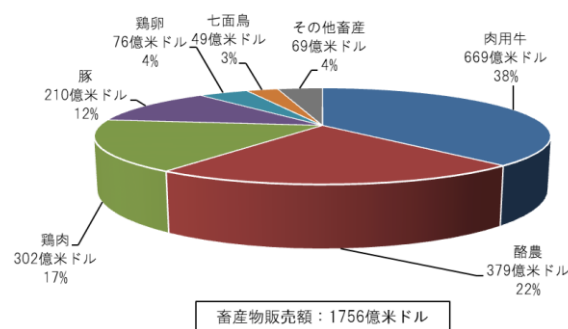
資料：USDA「United States and State Farm Income Data」

図2 作物販売額(2017年)



資料：USDA「United States and State Farm Income Data」

図3 畜産物販売額(2017年)



資料：USDA「United States and State Farm Income Data」

2 畜産の動向

(1) 酪農・乳業

米国は、年間9000万トンを超える生乳を生産する世界最大級の酪農国である。しかし、国内に巨大な消費市場を抱えていることなどから、国際乳製品市場での米国の位置付けは、さほど高いものとはなっていない。

① 主要な政策

酪農の主な制度には、連邦生乳マーケティング・オーダー制度（FMMO）、酪農マージン保護プログラム（MPP）、乳製品寄贈プログラム（DPDP）がある。

FMMOは、オーダー（生乳取引地域）内で取り引きされる生乳について、飲用向け1分類と加工向け3分類の計4分類の用途別に分け、それぞれの最低取引価格を設定するとともに、生乳取扱業者に対して、生産者へのプール乳価（用途別乳価を加重平均した乳価）支払いを義務付けている。これにより、生産者に対して安定的な収入の確保を可能とするとともに、消費者に対して合理的な価格で牛乳・乳製品を供給することを目的としている。2000年1月からは、①オーダー数の再編統合（当初の31地域が段階的に統合され、2004年4月から10地域へ）②生乳の用途区分の再分類（3区分から現行の4区分へ）③最低取引価格の設定に当たり、従来の基礎公式価格（BFP）に代えて、多成分価格形成システムに基づく新基礎価格の導入などの変更が加えられた。

MPPは、2014年農業法で、生乳収入損失補償契約プログラム（MILC）に代わる酪農家のセーフティネットとして創設された制度である。MPPは、補填の指標に飼料費を加味し、乳価と飼料費の差を酪農家の収益（マージン）とし、掛け率に応じて補償することにより、再生産を確保することを目的としている。

また、DPDPも2014年農業法で創設された制度である。DPDPは、乳製品価格の間接的な支持を目的に、一定の経済状況下において、米国農務省（U

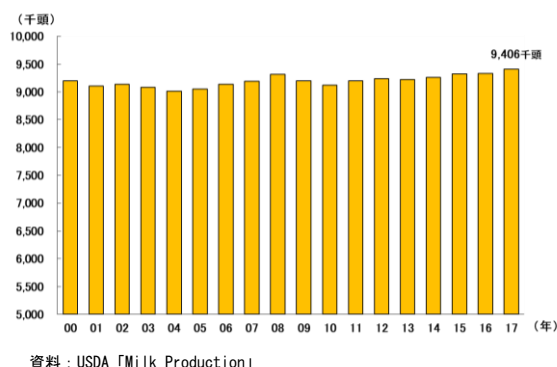
SDA)による乳製品の買い上げを実施するとともに、購買した乳製品を寄贈したり、政府のプログラムで使用するよう設計されている。

② 生乳の生産動向

ア 飼養頭数

乳用経産牛飼養頭数は、1980年代中ごろから一貫して減少傾向で推移してきたが、1999年に下げ止まった後は、小幅な増減を繰り返している。2017年の乳用経産牛飼養頭数は、前年比0.8%増の940万6000頭となった（図4）。

図4 乳用経産牛飼養頭数の推移



イ 生産量

2017年の生乳生産量は、乳用経産牛頭数および1頭当たり乳量の増加により、9776万1000トン（前年比1.4%増）とわずかに増加し、8年連続で前年を上回った（表1）。

表1 生乳・乳製品の生産量

(単位：千トン)

区分/年	2013	2014	2015	2016	2017
生乳	91,276	93,464	94,618	96,366	97,761
バター	845	842	843	834	838
脱脂粉乳	670	800	827	795	832
チーズ	5,036	5,222	5,370	5,525	5,733

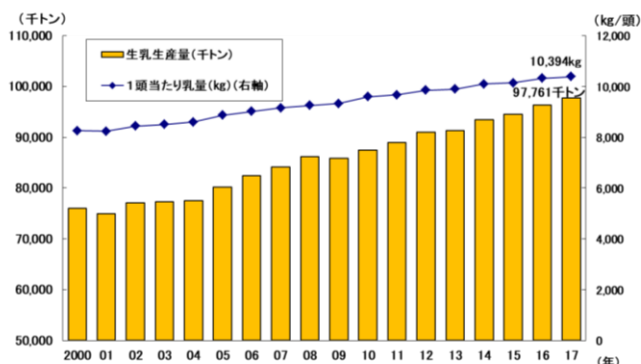
資料：USDA 「Milk Production」、 「Dairy Products」
注：チーズはカッテージチーズを除く。

ウ 経産牛1頭当たり乳量

経産牛1頭当たり乳量は、遺伝的改良などにより増

加傾向で推移しており、2017年は、1万394キログラム（前年比0.7%増）とわずかに増加した（図5）。

図5 生乳生産量と1頭当たり乳量の推移



資料：USDA「Milk Production」

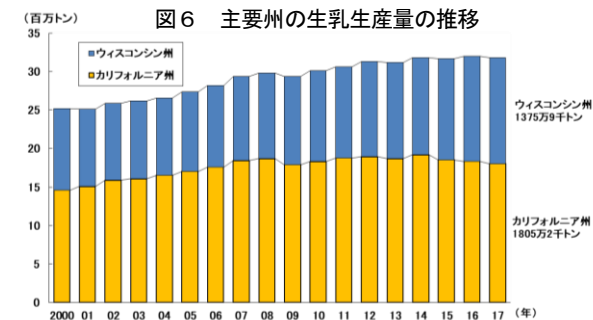
エ 地域別生産動向

生乳生産量の5割強は上位5州（カリフォルニア、ウィスコンシン、ニューヨーク、アイダホ、テキサス）で占められており、上位10州（上位5州にミシガン、ペンシルバニア、ミネソタ、ニューメキシコ、ワシントンを加える）では、全体の約7割を占めている。

一部の州では、安価な労働力を背景とした大規模化が進んでおり、代表的なカリフォルニア州は、1993年にウィスコンシン州を抜いて国内最大の生乳生産州になって以降も増加基調で推移してきた。

カリフォルニア州については、2009年に、前年終盤の国際乳製品価格の暴落を受けて1792万トン（前年比4.1%減）へ減少した。2010年から2014年までおおむね増加傾向で推移したものの、2015年に干ばつの影響により減少に転じた。その後も減少し、2017年は、同1.7%減の1805万2000トンとなった。一方、生乳生産量第2位のウィスコンシン州は、2017年に1375万9000トン（同0.7%増）となった（図6）。

図6 主要州の生乳生産量の推移



資料：USDA「Milk Production, Disposition and Income」



写真1 酪農家での乳牛飼養風景

③ 牛乳・乳製品の需給動向

ア 生産動向

2017年のチーズの生産量（カッテージチーズを除く）は、前年比3.8%増の573万3000トンとなった（図7）。このうち、チェダーチーズを中心とするアメリカンタイプ^(注1)は、230万1000トン（同1.6%増）となり、モッツアレラチーズなどイタリアンタイプ^(注2)は、244万7000トン（同1.7%増）となった。

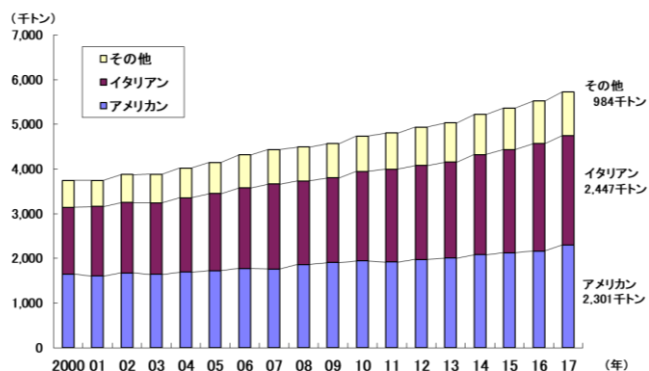
イタリアンタイプは、宅配ピザやファストフードでの需要増により、過去20年以上増加基調で推移している。同年のチーズ生産量に占める割合は、アメリカンタイプが40.1%（前年比1.0ポイント増）、イタリアンタイプが42.7%（同0.9ポイント減）となった。

また、バターの生産量は、83万8000トン（前年比0.4%増）となり、脱脂粉乳の生産量は83万2500トン（同4.7%増）といずれも増加した。

(注1) アメリカンタイプには、チェダー、コルビー、モントレージャックなどを含む。

(注2) イタリアンタイプには、モッツアレラ、パルメザン、プロヴォローネ、リコッタ、ロマーリオなどを含む。

図7 チーズ生産量の推移



資料：USDA「Dairy Products」

イ 消費動向

1人当たり年間飲用乳消費量（製品ベース、以下同じ）は、植物由来の脂肪を利用した飲料との競合などにより、近年減少傾向で推移しており、2017年は68.0キログラム（前年比2.6%減）となった。なお、飲用乳については、乳脂肪が必ずしも体に悪影響を及ぼすものではないとの認識が広まっていることなどから、低脂肪牛乳や無脂肪牛乳など低脂肪タイプの消費量が減少する一方、全脂牛乳（いわゆる普通の牛乳）の消費が伸びている。

1人当たり年間チーズ消費量（カッテージチーズを除く）は、近年、増加傾向で推移しており、2017年は16.8キログラム（前年比1.4%増）となった。また、1人当たり年間バター消費量は、2.6キログラム（同0.1%減）となった。

④ 牛乳乳製品の価格動向

ア 生乳価格

2017年の生乳の生産者販売価格は、国内外のチーズやバターの需要増に下支えされて、100ポンド当たり17.70米ドル（前年比8.6%高）とかなりの程度上昇したが、過去の水準には至っていない（表2）。

表2 生乳の生産者販売価格

（単位：米ドル/100ポンド）

区分/年	2013	2014	2015	2016	2017
生乳平均価格	20.10	24.00	17.10	16.30	17.70

資料：USDA「Agricultural Price」

イ 乳製品の卸売価格

2017年のバターの卸売価格は、国内外の需要増に伴って1ポンド当たり232.8セント（同11.8%高）となった（表3）。また、脱脂粉乳も、同85.6セント（同2.6%高）とわずかに上昇した。さらに、チェダーチーズは、堅調な需要を背景に、190.3セント（同1.6%高）と前年を上回った。

表3 乳製品の卸売価格の推移

（単位：セント/ポンド）

区分/年	2013	2014	2015	2016	2017
バター	155.6	216.4	208.9	208.2	232.8
脱脂粉乳	170.3	171.5	90.9	83.4	85.6
チェダーチーズ	176.4	240.4	191.1	187.4	190.3

資料：USDA「Dairy Market News」

注1：バターはシカゴ・マーカントイル取引所の現物価格（グレードAA）。

注2：脱脂粉乳は西部のFOB価格。

注3：チーズはシカゴ・マーカントイル取引所の現物価格。

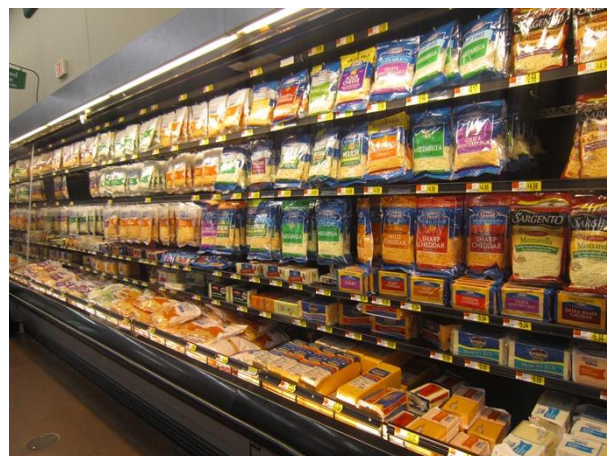


写真2 小売店でのチーズの陳列風景

⑤ 乳製品の政府買い上げ

乳製品価格支持プログラム（DPPSP）は2013年9月で廃止され、代わりに乳製品寄贈プログラム（DPDP）が創設された。2017年は、堅調な輸出需要を反映して米国内の乳製品価格が堅調に推移したことから、政府による余剰乳製品の買い上げは7年連続で実施されなかった。

(2) 肉牛・牛肉産業

米国は、世界の牛肉生産量の2割程度を占める最大の牛肉生産国であると同時に、世界最大の牛肉輸入国でもある。国内的にも、肉牛産業の農産物販売額に占める割合は最大となっており、米国農業の中で最も重要な部門の一つである。

肉用子牛生産は、家族経営による生産・管理が行われる一方、育成された肥育もと牛に関しては、大規模なフィードロットで効率的な穀物肥育が行われている。また、肉牛の流通面では、大手パッカーによる寡占化が顕著となっている。

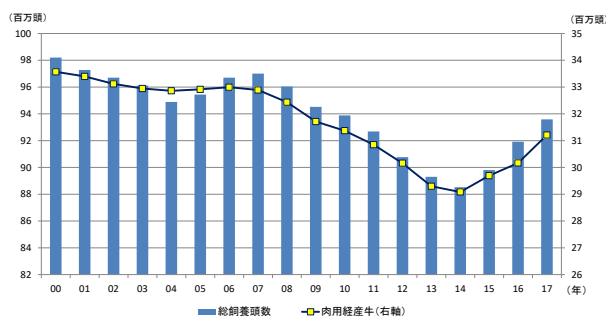
① 肉牛の生産動向

牛飼養頭数は、2006年後半以降の飼料コスト高や2011年以降の干ばつなどにより、肉用牛繁殖経営の収益性が悪化し、肉用繁殖雌牛を中心に淘汰が進んだことから、2014年まで減少傾向で推移してきたが、2015年は、草地の状態が改善されたことによる牛群再構築の進展により、2007年以来の増加に転じた。2017年は、前年比1.8%増の9358万5000頭と、3年連続で増加した(図8)。

2017年の飼養頭数の内訳を見ると、肉用繁殖雌牛は前年比3.4%増の3121万頭となり、500ポンド(約227キログラム)以上の肉用繁殖後継牛は、641万9000頭(同1.2%増)と増加した。草地の状態が改善されたことなどから、繁殖農家の増頭意欲が高まったとみられている。

また、同年の子牛生産頭数(乳用種を含む)は、前年比2.1%増の3580万8000頭となった。

図8 牛飼養頭数の推移



資料：USDA「Cattle」
注：各年1月1日現在。



写真3 フィードロットの風景

② 牛肉の需給動向

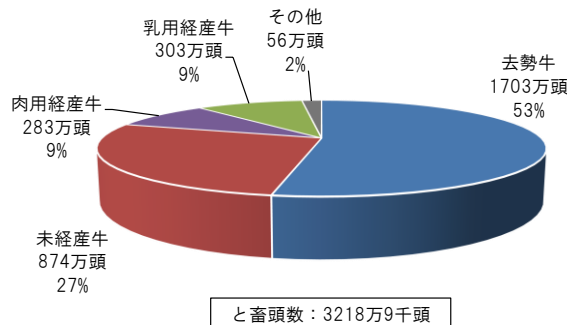
ア 生産動向

2017年の成牛と畜頭数は、前年比5.3%増の3218万9000頭となった。

種類別では、去勢牛は同1.7%増、肉用経産牛は同9.5%増、未經産牛は同11.8%増、乳用経産牛は同3.5%増といずれも増加した(図9)。

このほか、同年の子牛と畜頭数は、同5.0%増の51万2000頭となった。

図9 種類別成牛と畜頭数(2017年)



資料：USDA「Livestock Slaughter」

一方、2017年の成牛のと畜時平均生体重(連邦政府検査ベース)は、飼料穀物価格は安定してしまものの、食肉パッカーからの需要の増加に伴い肥育期間が短くなったことなどから、前年比1.0%減の612.9キログラム、平均枝肉重量(連邦政府検査ベース)は同1.4%減の370.8キログラムとなった。

主要7州(アリゾナ、カリフォルニア、コロラド、アイオワ、カンザス、ネブラスカ、テキサス)の肥育もと牛導入頭数は2053万9000頭(同9.0%増)、また、肥育牛出荷頭数は1910万2000頭(同4.8%増)となった。

こうしたことから、同年の牛肉生産量（枝肉重量ベース）は、前年比3.8%増の1187万8000トンとなった（表4）。

表4 牛肉需給（枝肉換算）の推移

（単位：千トン）

区分/年	2013	2014	2015	2016	2017
生産量	11,666	11,000	10,749	11,440	11,878
輸入量	1,020	1,337	1,529	1,366	1,358
輸出量	1,174	1,167	1,028	1,160	1,297
在庫量	265	268	310	343	294
消費量	11,556	11,195	11,236	11,643	12,017
1人当たり消費量 （年間、キログラム）	25.6	24.6	24.5	25.2	25.9

資料：USDA「Livestock, Dairy, and Poultry Outlook: Table」
注：1人当たり消費量は小売重量ベース。

イ 輸出入動向

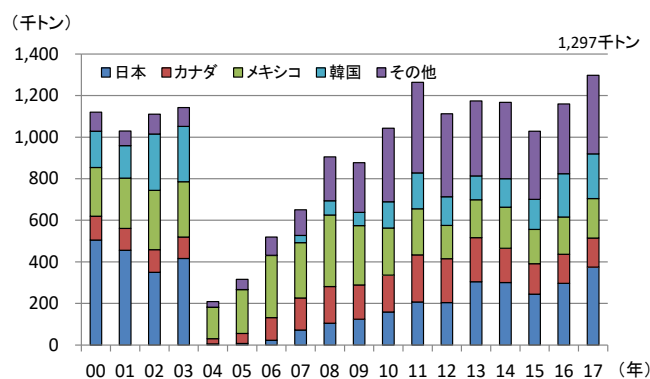
2017年の牛肉輸入量（枝肉重量ベース）は、前年比0.6%減の135万8000トンとなった。国別に見ると、豪州は干ばつによる飼養環境の悪化から牛の淘汰が進み、飼養頭数が減少したことから31万5000トン（同9.4%減）と減少した。また、ニュージーランドも、同9.1%減の25万3000トンと減少した。一方、カナダは、同国も繁殖雌牛飼養頭数の減少傾向が続いていたものの、米国の牛肉需要により33万6000トン（同3.3%増）と増加した。

同年の生体牛の輸入は、メキシコからが116万4000頭（同23.4%増）と大幅に増加した。カナダからは、同国でも飼養頭数が減少していることなどから、64万2000頭（前年比16.0%減）となった。全体では180万7000頭（同5.8%増）と昨年の落ち込み（同13.9%減）から回復した結果となった。

牛肉輸出量は、2003年12月に米国内で初めてBSEが発生した影響を受け、2004年に大幅に減少した。2005年以降は増加傾向で推移した。その後、牛肉生産量の落ち込みなどにより2015年には100万トン強の水準まで落ち込みを見せたが、2016年は牛肉生産量の増加に加え、輸出競合国である豪州産の輸出減少により増加に転じた。2017年も同傾向が継続し、前年比11.8%増の129万

7000トンとかなり大きく増加した。国別では、最大の輸出先である日本向けが37万5000トン（同26.0%増）、韓国向けが21万4000トン（同2.9%増）、メキシコ向けが19万トン（同6.2%増）と主要国のいずれも増加した（図10）。

図10 牛肉の輸出量と相手国の推移



資料：USDA/ERS「Livestock and Meat Trade Data」

ウ 消費動向

1人当たり年間牛肉消費量（小売重量ベース）は、2017年は、前年比2.5%増の25.9キログラムとなった。

③ 肉牛・牛肉の価格動向

ア 肥育もと牛価格

肥育もと牛価格（オクラホマシティー、600～650ポンド）は、2016年は、牛群再構築に伴う保留傾向が維持されたものの、飼養頭数の増加に伴いフィードロットへの供給余力が増したことから、前年比32.3%安と大幅に下落した。2017年は若干回復し、同1.6%高の100ポンド当たり155.8米ドルとなった（表5）。

イ 肥育牛価格

2017年の肥育牛価格（ネブラスカ、1100～1300ポンド、去勢牛、チョイス級^(注)）は、大幅安となった前年（前年比18.8%安）の反動により、同1.0%高の100ポンド当たり121.9米ドルとなった。

（注）肉質等級のうち、上から2番目の等級。

ウ 牛肉卸売価格

2017年の卸売価格（チョイス級、600～900ポンド、カットアウトバリュー）は、国内需要の高まりにより前年比1.5%高の100ポンド当たり209.7米ドルとなった。

エ 牛肉小売価格

2017年の平均牛肉小売価格（チョイス級）は、前年比0.9%安の1ポンド当たり590.9セントとなった。

表5 生体牛と牛肉の価格の推移

（単位：米ドル/100ポンド）

区分/年	2013	2014	2015	2016	2017
肥育もと牛	158.8	225.1	226.5	153.4	155.8
肥育牛	126.2	155.1	148.6	120.7	121.9
牛肉卸売価格 (カットアウトバリュー)	195.6	239.2	237.5	206.7	209.7
牛肉小売価格 (セント/ポンド)	528.9	597.0	628.9	596.4	590.9

資料：USDA 「Livestock, Dairy and Poultry Situation and Outlook : Table」
注：カットアウトバリューとは、各部分肉の卸売価格を1頭分の枝肉に再構成した卸売指標価格。枝肉そのものではない。

（3）養豚・豚肉産業

米国の養豚は、アイオワ州やイリノイ州を中心とするコーンベルト地帯で、伝統的に穀物生産や肉牛経営の副業として営まれてきた。一方、ノースカロライナ州やオクラホマ州でのインテグレーションの出現は、養豚産業に対して、生産・流通などの面で大きな変化をもたらした。また、各州で環境規制を強化する動きがみられることから、大規模経営体による環境問題も顕在化している。

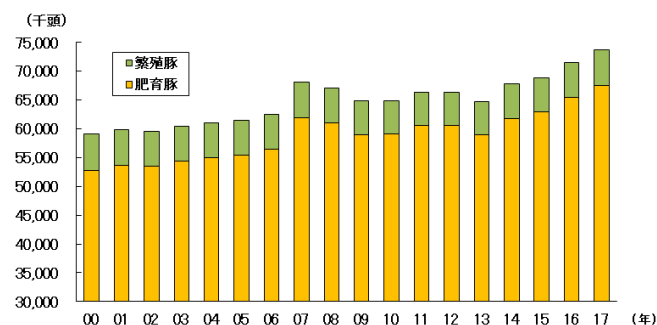
① 肉豚の生産動向

豚飼養頭数は、2010年以降はおおむね増加傾向で推移したものの、2013年は豚流行性下痢（PED）の発生により落ち込んだ。しかし、2014年以降再び増加に転じ、2017年は前年比3.0%増の7369万5000頭と、1944年以降で最高を記録した（図11）。

飼養頭数の内訳を見ると、繁殖豚は617万9000

頭（同1.5%増）、肥育豚は6751万6000頭（同3.2%増）となった。

図11 繁殖豚頭数と肥育豚頭数の推移



資料：USDA 「Quarterly Hogs and Pigs」

注：各年12月1日現在

2017年（2016年12月～2017年11月）の子豚生産頭数は、良好な収益性により繁殖母豚が増加したことに加え、一腹当たり産子数が10.6頭（同0.9%増）となったことから、1億3028万頭（同3.4%増）となった。



写真4 肉豚の飼養風景

② 豚肉の需給動向

ア 生産動向

2017年のと畜頭数（コマーシャルベース）は、飼養頭数の増加に伴い、1億2131万7000頭（前年比2.6%増）となり、豚肉生産量は1160万5000トン（同2.6%増）と過去最高を記録した（表6）。

一方、2017年のと畜時平均生体重（連邦政府検査ベース）は、128.4キログラム（前年比0.4%増）、平均枝肉重量（連邦政府検査ベース）は、95.8キログラム（同0.1%減）となった。

表6 豚肉需給（枝肉換算）の推移

区分/年	2013	2014	2015	2016	2017
生産量	10,517	10,361	11,114	11,313	11,605
輸入量	399	459	506	495	506
輸出量	2,262	2,310	2,272	2,376	2,555
在庫量	280	253	267	230	251
消費量	8,665	8,544	9,340	9,476	9,541
1人当たり消費量 (年間、キログラム)	21.2	20.8	22.6	22.7	22.8

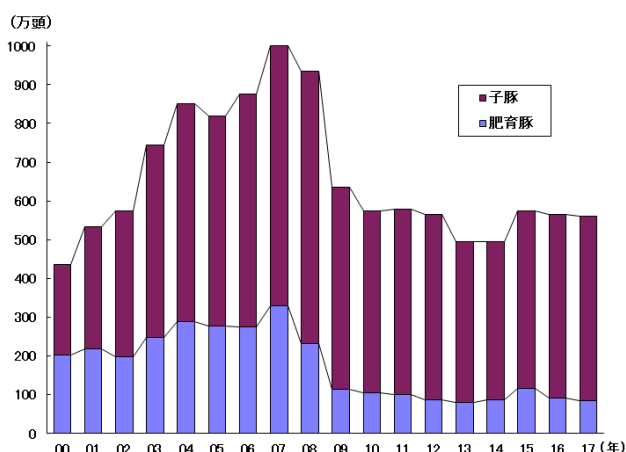
資料：USDA/ERS「Livestock and Meat Trade Data」
注：1人当たり消費量は小売重量ベース。

イ 輸出入動向

2017年の豚肉の輸入量（枝肉重量ベース）は、豚肉生産量の増加により、50万6000トン（前年比2.2%増）となった。国別に見ると、最大の輸入先であるカナダが32万9000トン（同8.0%減（総輸入量に占める割合は65.0%））とかなりの程度減少したものの、ポーランドは7万5000トン（同65.0%増（同14.9%））と大幅に増加した。

同年の生体豚の輸入は主に子豚であり、そのほぼ100%がカナダからである。同国からの輸入頭数は、米国内の豚飼養頭数の増加により、559万7000頭（前年比1.1%減）となった（図12）。

図12 カナダからの生体豚輸入頭数の推移

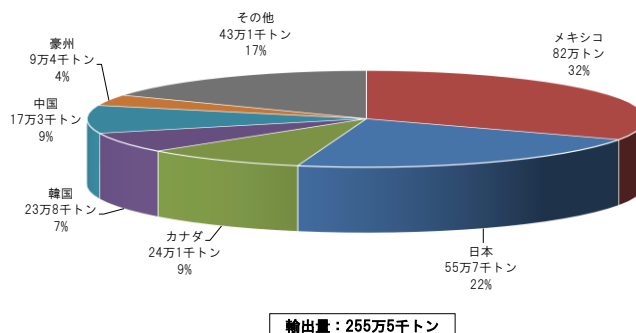


資料：USDA/ERS「Livestock and Meat Trade Data」

輸出量（枝肉重量ベース）は、2013年にPEDによる減産で減少し、2014年には増加に転じたが、2015年には、主要通貨に対して米ドル高で推移した為替相場などから再び減少した。2016年以降、生産量の増加に伴い、再び増加に転じた。2017年

は、前年比7.5%増の255万5000トンとなった。国・地域別に見ると、メキシコ向けは、価格帯の安い豚肉を中心に好調であったことから82万トン（同12.3%増）となった。他の主要国では、日本向けは55万7000トン（同1.3%増）、カナダ向けは24万1000トン（同0.8%減）、韓国向けは23万8000トン（同29.1%増）、中国向けは17万3000トン（同23.4%減）となった（図13）。

図13 豚肉の輸出相手国（2017年）



資料：USDA「Livestock, Dairy and Poultry Situation and Outlook」

ウ 消費動向

2017年の1人当たり年間豚肉消費量（小売重量ベース）は、22.8キログラム（前年比0.2%増）となった。2015年以降、牛肉価格が高値で推移したことによる代替需要などにより、消費が増加している。

③ 肥育豚・豚肉の価格動向

ア 肥育豚価格

肥育豚価格は、2009年には世界的な景気の後退や新型インフルエンザなどによる内需・外需の減退から、100ポンド当たり41.2米ドルに下落した。2011年は、輸出需要の高まりなどにより、同66.1米ドルと過去最高値を記録し、その後も同60米ドル台の高値を維持した。2014年はPEDの影響などにより上昇したが、2015年以降、飼養頭数の増加などにより下落に転じた。2017年は、前年の落ち込みから回復し、前年比9.3%高の同50.5米ドルとなった（表7）。

表7 肥育豚と豚肉の価格の推移

(単位:米ドル/100ポンド)

区分/年	2013	2014	2015	2016	2017
肥育豚	64.1	76.0	50.2	46.2	50.5
豚肉卸売価格 (カットアウトバリュー)	91.7	110.1	79.0	78.4	84.0
豚肉小売価格 (セント/ポンド)	364.4	401.9	385.3	374.7	378.4

資料: USDA 「Livestock, Dairy and Poultry Situation and Outlook : Table」

注1: 肥育豚価格は、全米の平均価格。

注2: カットアウトバリューとは、各部分肉の卸売価格を1頭分の枝肉に再構成した卸売指標価格。枝肉そのものではない。

イ 豚肉価格

2017年の豚肉卸売価格(カットアウトバリュー)は、米国の需要の増加などにより100ポンド当たり84.0米ドル(前年比7.2%高)となった。

また、平均豚肉小売価格も1ポンド当たり378.4セント(前年比1.0%高)と前年をわずかに上回った。

(4) 養鶏・鶏肉産業

米国の養鶏産業は、飼料穀物の一大生産国という利点を生かし、生産から流通までの一貫したインテグレーションの進展により、極めて効率的な生産が行われている。また、国内では、消費者の健康志向からむね肉を中心として消費を大きく伸ばすと同時に、不需求部位のもも肉を中心に、鶏肉生産量の約2割を輸出している。

① ブロイラーのふ化羽数の動向

2017年のブロイラーふ化羽数は、飼料穀物価格が安値で推移したことなどから、前年比1.5%増の96億1730万5000羽となった。

② 鶏肉の需給動向

ア 生産動向

2017年のブロイラー生産量(可食処理ベース)は、飼料価格の下落に伴い増羽が進んだことなどから、前年比2.4%増の1869万6000トンとなった(表8)。1羽当たり平均重量(生体ベース)は、骨なしむね肉の需要増に伴うブロイラーの大型化を背景に近年増加傾向にあり、2017年は2.81キログラム(同0.6%増)となった。

表8 ブロイラー需給(可食処理ベース)の推移

(単位:千トン)

区分/年	2013	2014	2015	2016	2017
生産量	16,976	17,306	17,971	18,262	18,696
輸入量	55	53	59	59	57
輸出量	3,332	3,310	2,867	3,014	3,078
在庫量	303	309	378	353	388
消費量	13,691	14,044	15,094	15,332	15,639
1人当たり消費量 (年間、キログラム)	37.2	37.8	40.4	40.7	41.3

資料: USDA 「Livestock, Dairy and Poultry Outlook : Table」

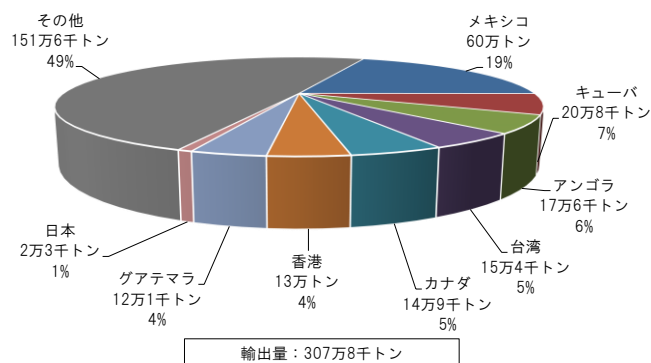
注: 1人当たり消費量は小売重量ベース。

イ 輸出動向

2017年のブロイラーの輸出量(可食処理ベース)は、前年比2.1%増の307万8000トンとなった。ただし、鳥インフルエンザ発生に伴う輸出先国の禁輸措置などにより、回復傾向にはあるものの2014年比では7.0%の減少となっている。

主要国・地域別に見ると、メキシコ向けは前年比6.5%減、キューバ向けは同6.8%増、アンゴラ向けは同5.7%増、台湾向けは同5.0%増、カナダ向けは同8.1%減となった(図14)。

図14 ブロイラーの輸出相手国(2017年)



資料: USDA 「Livestock, Dairy, and Poultry Situation and Outlook」

ウ 消費動向

2017年の1人当たり年間鶏肉消費量(小売重量ベース)は、前年比1.5%増の41.3キログラムとなった。

③ ブロイラーの価格動向

ア ブロイラーの生産者販売価格

2017年のブロイラーの生産者販売価格は、米国内外の需要の増加などにより、前年比12.3%高の1ポンド当たり54.6セントとなった(表9)。

イ 鶏肉価格

(ア) 卸売価格

2017年のブロイラーの丸どり卸売価格(中抜き、12都市平均)は、前年比11.0%高の1ポンド当たり93.6セントとなった。なお、国内向けが主体となっているむね肉が1ポンド当たり128.1セント(前年比9.9%高)、輸出向けが主体のもも肉は同46.9セント(同13.8%高)とどちらも上昇した。

(イ) 小売価格

ブロイラーの丸どり小売価格(中抜き)は、前年比0.5%高の1ポンド当たり147.2セントとなった。

表9 ブロイラー価格の推移

(単位:セント/ポンド)

区分/年	2013	2014	2015	2016	2017
生産者販売価格(生体)	60.4	63.8	52.9	48.6	54.6
卸売価格(丸どり)	99.7	104.9	90.5	84.3	93.6
丸どり小売価格	149.6	153.3	148.8	146.4	147.2

資料: USDA 「Livestock, Dairy, and Poultry Outlook: Table」

注: 卸売価格、丸どり(中抜き)の価格。

(5) 飼料穀物

米国は、世界最大の飼料穀物の生産・輸出国である。飼料穀物の主力であるトウモロコシは、世界の生産量および貿易量の4割程度を占めていることから、世界の需給動向に与える影響力は極めて大きい。

① 穀物の生産動向

2017/18年度(9月~翌8月)のトウモロコシ(サイレージ用を除く)の生産量は、単収は増加したものの収穫面積が減少したことにより、146億900万ブッシェル(3億7100万トン^(注)) (前年度比3.6%減)と前年度をやや下回った(表10)。同年度の期末在庫は、前年度をかなりの程度下回る

21億4000万ブッシェル(5400万トン)となった。

(注) 1ブッシェルを25.4キログラムとして換算。

表10 トウモロコシ需給の推移

(単位:百万トン)

区分/年度	13/14	14/15	15/16	16/17	17/18
生産量	351	361	345	385	371
国内消費量	293	302	299	314	314
うち飼料向け	127	134	130	139	135
輸出量	49	47	48	58	62
期末在庫量	31	44	44	58	54

資料: USDA 「Feed Grain Database: Yearbook Tables」



写真5 トウモロコシの収穫風景

② 穀物の輸出動向

2017/18年度のトウモロコシの輸出量は、24億3800万ブッシェル(6200万トン)(前年度比6.3%増)とかなりの程度増加した。このうち、メキシコ向けは1572万トン(同12.8%増)となり、3年連続で最大の輸出先となった。一方、2014/15年度まで最大の輸出先国であった日本向けは、1321万トン(同2.6%減)となり、2番目の輸出先であった。

③ 穀物の価格動向

2017/18年度のトウモロコシの生産者販売価格は、1ブッシェル当たり3.36米ドル(前年度並)となった(表11)。

表11 トウモロコシ価格の推移

(単位:米ドル/ブッシェル)

区分/年度	13/14	14/15	15/16	16/17	17/18
生産者販売価格	4.46	3.70	3.61	3.36	3.36

資料: USDA 「Feed Grain Database: Yearbook Tables」